禪宗の教學發達に就て（三）

伊藤古鑑

（一）

我が禪宗教學の發達上に於て、禪經實修時代の開拓者は鳩摩羅什と佛馱跋多羅の二人であつた。この二大飜譯家の譯出せる禪經に依つて、一は關中に、一は廬山を中心として、漸次に禪觀を鼓吹し、禪教を流布せしめたのである。而してこの二師の門下には幾多の禪經實修者を出だし、後來の達磨禪に近き思想の涵養にまで導いたと云ふことは忘れてならぬことであらう。決して達磨禪の思想が突如として起つたものではない。既に幾多の禪師がこの地に輩出し、かの地より渡來して、そこに多年の傳道宣布の結果が、終に達磨大師をして禪宗初祖の名を爲さしめ、純禪の時代を產んだものではなからうかと思ふ。

前に述べた禪經實修時代に於ては、專ら鳩摩羅什と佛馱跋多羅との兩人を擧げ、その門下の禪教思想を說いたのであるが、既に此の時代に於て幾多の坐禪僧が西天より渡來し、禪觀を勸め坐禪を實修して居たのである。卽ち其の中に於ても特に有名なる禪觀傳來者を擧げるならば、佛馱什、求那跋摩、曇摩密多、曇良耶舍、僧伽達多、僧伽羅多、求那跋陀羅、沮渠京聲などであつて、その他

にも多くの隱れたる坐禪僧が渡來したことであらうが、別に飜譯の經典もなく、また有名な嗣法者も無かつたが爲めに、不幸にして其の名を後世に殘すことが出來なかつたのであらう。今それ等の隱れたる傳來者の功績を感謝すると共に、前述の重なる禪觀傳來者の傳記を少しく考察して見ることにせよう。

（二）

慧皎の『高僧傳』に依つて鳩摩羅什とか佛馱跋多羅とかの時代已後を一讀して見ると、多くは罽賓の沙門が來朝し、禪師と稱して律に兼ねるに禪を以てし、後に至るに從つて禪を專門に修するやうになつたものゝやうである。卽ち『高僧傳』第一第二に出て居る曇摩耶舍、弗若多羅、卑摩羅叉、佛陀耶舍の如きは、共に罽賓の人であつて、みな律の達者であつた。同じく第三に出て居る佛馱什の傳には「專精律品、兼達禪要」と云ひ、求那跋摩の傳には「深達律品、妙入禪要」と云ふて、禪律兼修を擧げ、更に下つて曇摩密多の傳に至れば「博貫群經、特深禪法」と云ひ、或は「學徒濟濟、禪業甚盛」と云ひ、また曇良耶舍の傳には、西域の人ではあるが「雖三藏兼明、而以禪門專業」と云ひ、或は「處處弘道、禪學成群」と云ふて、次第々々に禪學の旺盛に赴いたことを物語つて居る。いま其の僧傳の一々に就て述べるならば、佛馱什は罽賓の人で、少にして彌沙塞部に業を受け、專ら律品に精しく『五分律』（註一）を飜譯した人であるが、禪にも大に通じて居たのである。宋の景平

元年七月（皇紀一〇八三）に揚州に來て居るのであるが、その終りは知ることが出來ない。この佛馱什の來朝は鳩摩羅什の來朝に遲るゝこと二十一年、佛馱跋多羅の來朝に遲るゝこと四年であつて、卽ち禪經實修時代に屬するのである。その翌年、宋の文帝の元嘉元年（皇紀一〇八四）には求那跋摩が來朝して居る。また曇摩密多も來朝し、同じく元嘉の初めに聶良耶舍も僧伽達多も來朝して居るのである。

求那跋摩の僧傳は『出三藏記集』第十四、『高僧傳』第三を始め、『歷代三寶記』第十、『法苑珠林』第四十二、『道宣律師感通錄』第三、『神僧傳』第三等に出て居る。彼れの來朝は元嘉元年九月、宋の文帝の迎請に依つて宋境に來たのであるが、始めは虎市山に住し、その山が耆闍崛山に髣髴として居るので、改名して靈鷲山と云ひ、山寺の外に禪室を立て、累日出でずして坐禪を專修せられたやうである。建業に出でゝ文帝に謁したのは天嘉八年の正月であつた。その禪敎の思想は素より委しいことは分らないけれども、その行狀は多くの奇蹟に富んで居るやうに思はれる。或る時は虎に値ふて杖を以て弄し、その頭に按じたと云ひ、或る時は雨を冒しても沾はず、泥を履んでも濕はず、壁上に羅云像及び定光儒童布髮の形を圖作すれば、每夕に光を放つたと云ひ、或る時は一白師子の瑞像が顯はれ、禪室に彌漫して靑蓮花を生じたと云ひ、その他臨終に於ける奇瑞などを擧げて居るが、これを要するに彼れが六十二歲にして此の世を終る時、豫め遺文偈頌三十五行を造つて弟

子阿沙羅に付したと云ふものを讀んで見ると、

我昔曠野中、初觀於死屍、膖脹蟲爛壞、臭穢膿血流、繫心緣彼處、此身性如是、常見此身相、貪蛾不畏火、如是無量種、修習死屍觀、放捨餘聞思、依止林樹間、是夜專精進、正觀常不忘、境界恒在前、猶如對明鏡、如彼我亦然、由是心寂靖、輕身極明淨、清涼心是樂、增長大歡喜、則生無著心、變成骨鎖相、白骨現在前、朽壞肢節離、白骨悉磨滅、無垢智熾然、（『大正藏經』第五十卷三四一丁）

と云ひ、常に白骨觀を修し、染着心を去らしめ、業及び業果報を滅せんと努め、四念處、煖頂忍、世第一法を經て初果二果を得たと云ひ、最後に「今此身滅盡、寂若燈火滅」と云ふて居るのであるから、彼れの禪敎は小乘であつて、好んで深山幽谷に苦錬辛修した習禪者のやうに思はれるが、しかし彼れの譯經から云ふと（註二）『菩薩善戒經』九卷を譯して居る。その內容は三十品あり、第一の『序品』は『大寶積經優婆離會』第二十四と同じであり、第二品已下は曇無讖譯の『菩薩地持經』と略ぼ同本であつて、『瑜伽論』の菩薩地に當るのであるから、その譯者たる求那跋摩も大乘律傳來者であつたに相違ない。且つ彼れが宋の文帝に敎へたと云ふところを讀んで見ると、「夫道在心不在事、法由己非由人」と云ひ、また『法華』とか『十地』とかを講じたと云ふのであるから、禪觀は小乘であつても彼れの思想は大乘的であつたと云はねばならぬ。

（三）

次に曇摩密多の僧傳も『出三藏記集』第十四、『高僧傳』第三、『開元釋敎錄』第五、『神僧傳』第三等に出て居る。彼れは罽賓の人で、少にして遊方を好み、誓つて宣化を志し、諸國を經て龜茲國に入り、更に流沙を度つて燉煌に到り、終に宋の元嘉元年に蜀に行き、荆州長沙寺に禪閣を立てゝ習禪を專らにせられた。その行狀は「密多天性凝靜雅愛山水」と云ひ、「神力通變自在遊處」と云ひ、常に迦毘羅神王の影向を受け、「常以禪道敎授、千里諮受四輩、遠近皆號大禪師」と云ふて居るのを見ても、その一班を知ることが出來る。譯出の經典は『出三藏記集』第二に依ると四部六卷ある。（註三）

『觀普賢菩薩行法經』一卷

『虛空藏觀』一卷

『禪秘要』三卷

『五門禪經要用法』一卷

後の二部は共に禪經に關係あるもので、『禪秘要』は散佚したと云ふけれども、現今『大藏經』に存する羅什譯の『禪秘要法經』がそれに當ると云ふ說もある。（註四）『五門禪經要用法』は『大正藏經』第十五卷に收められて居るが、その內容は安般、不淨、慈心、觀緣、念佛の五門禪であつて、經初

には

坐禪之要法有二五門一、一者安般、二不淨、三慈心、四觀緣、五念佛、安般不淨二門觀緣、此三門有二內外境界一、念佛慈心緣二外境界一、所以五門者、隨二衆生病一、若亂心多者敎以二安般一、若貪愛多者敎以二不淨一、若瞋恚多者敎以二慈心一、若着我多者敎以二因緣一、若心沒者敎以二念佛一、（『大正藏經』第十五卷三二五丁）

と云ひ、その說明に至つては念佛、不淨、慈心の三門のみを雜然と前後交錯して述べて居るので、標題とは相應せないやうに思ふ。恐らくは安般と觀緣との二門を缺いたものかも知れぬが、羅什譯の『坐禪三昧經』の如き秩序整然たる內容とは同日に論ずることは出來ない。而してこの譯者たる曇摩密多の禪法も此の禪經に依つたものであらう。その門流も大に傳へられたやうに思ふ。卽ち曇摩密多は宋の元嘉十九年七月六日、八十七歲で歿せられたが、その門下には定林の達禪師あり、僧審あり、僧審の弟子には靈鷲寺慧高あり、また『高僧傳』第十一の僧審のところに、「有二僧謙、超志、法達、慧勝一、並業二禪、亦有二異迹一」と云ふて、大に曇摩密多の門流を傳へたやうに思はれる。

次に罽良耶舍は西域の人であつて、特に禪門を以て專業とせられ、一禪觀每に七日も起たずに習禪せられたやうである。なほ阿毘曇にも通じ、律部をも善くしたと云ふのであるが、支那に來つて『觀無量壽經』を飜譯したと云ふので、後世の淨土敎の上には至大の影響を與へたけれども、この時

代の念佛は要するに禪觀の方便に習したもので、曇良耶舍は全く習禪者を以て任じた一人であると云はねばならぬ。『高僧傳』第三に依つて見ると、

雖三藏兼明、而以禪門專業、每一遊觀、或七日不起、常以三昧正受傳化諸國、以元嘉之初、遠冒沙河、萃于京邑、太祖文皇深加歎異、初止鐘山道林精舍、沙門寶誌崇其禪法、沙門僧含請譯藥王藥上觀及無量壽觀、含即筆受、以此二經是轉障之秘術、淨土之洪因、故、沈吟嗟味流通宋國。(『大正藏經』第五十卷三四三丁)

またこれと同時に天竺沙門僧伽達多あり、終日山中に坐禪を修して群鳥の食を授くるを受けたと云ひ、元嘉十八年に臨川康王の請に應じて廣陵に出で、後に建業に終られたと云ふことである。また僧伽羅多も同時代の人で、常に林下に宴坐し、元嘉十年に鐘阜之陽に卜居したと云ふことであるが、これを要するに此の時代の人は共に習禪の人であつて、その禪法の內容は委しく知ることが出來ないけれども、罽賓國の沙門は多く阿毘曇を良くし、律に通じて居たと云ふのであるから、その禪法は恐らく小乘禪の範圍を脫せなかつたものゝやうに思はれる。

（四）

次に求那跋陀羅の僧傳も『出三藏記集』第十四、『高僧傳』第三、『歷代三寶記』第十、『開元釋敎錄』第五、『神僧傳』第三等に出て居る。彼れは中天竺の人、始め婆羅門の出であつた爲めに五明

諸論を學び、天文書算醫方呪術に通じて居たのであるが、轉じて小乘に入り、更に大乘を學んで『大品般若』及び『華嚴經』を良くし、元嘉十二年（皇紀一〇九五）に廣州に至り、祇洹寺に於て『雜阿含經』を譯出し、東安寺に於て『大法鼓經』を譯出し、丹陽郡に於て『勝鬘經』『楞伽經』を譯出して居る。その譯出の經典を檢するに、『出三藏記集』第二には十三部七十三卷を擧げ、『開元釋敎錄』第五には五十二部一百三十四卷の多きを出して居る。その中、特に注意すべきものは『楞伽阿跋多羅寶經』四卷と『阿蘭若習禪經』二卷であるが、後者の譯出は前號に云ふた如く誤謬であり、前者の譯出のみは我が禪宗初祖達磨大師が二祖に心印として授けたと云ふので有名である。この『楞伽經』に就ては嘗て述べたことがあるから此處には略するが（註五）要するに達磨禪は此の『四卷楞伽』から出たものと云へないにしても、少くともこれに最も近いものであつたことは爭はれぬ。故にこの『四卷楞伽』の研究は我が禪門としては忘れてならぬことであらう。而して此の求那跋陀羅の思想內容に就て考へて見ると、彼れは『雜阿含經』五十卷、『衆事分阿毘曇論』十二卷（註六）等を飜譯して小乘にも通じて居たが、主として『華嚴』等の大乘經典を講じて居たやうである。故に世に稱して摩訶衍と呼び、四衆の崇敬を受けて居たと云ふことである。常に觀世音を信じ、秘咒を誦して靈驗を顯はしたと云ふて、僧傳には彼れが支那に來朝する時にも、大明六年の天下亢旱の際にも、その靈驗を說明して居るが、しかし彼れが坐禪をしたと云ふことは出て居らない。思ふに

彼れは習禪者でなく、譯經僧であつて、禪觀傳來者でなかつたかも知れぬ。唯だ大乘の經典を飜譯する中、『四卷楞伽』なるものがあつて、それが達磨大師に依用されたと云ふ點だけを注意すれば良いであらう。（註七）彼れの性格の一片は「跋陀自幼以來蔬食終身、常執持香爐未嘗輟手、每食竟輒分食飛鳥、乃集手取食」と云ふが如きで、性極めて慈和恭順、良く禮を守られたと云ふことである。太始四年（皇紀一一二八）正月、春秋七十有五で歿せられた。

また此の時代に寶意と云ふ人があつた。康居ではあつたが常に天竺に居つて、梵名を阿那摩低と云ふて居る。宋の孝建中（皇紀一一一四～一一一六）に京都瓦官禪房に來つて坐禪を修し、齊の文惠文宣及び梁の太祖などに師禮を受け、永明（皇紀一一四三～一一五三）末年に終られたと云ふことであるが、『高僧傳』第三の僧傳に依つて見ると、彼れも經律に通じ、良く神咒を誦して吉凶を知り、人の往事を見たと云ふことで神異を顯はしたものらしい。この時代の求那毘地（註八）も大小乘の達者ではあつたが、陰陽師のやうなことをやつて居たので、これ等を習禪者と見るのは、どうも適當でないやうに思ふ。

次に沮渠京聲の僧傳も『出三藏記集』第十四、『高僧傳』第二、『開元釋敎錄』第五等に出て居る。即ち『高僧傳』では曇無讖のところに附加せられて居るが、それに依つて見ると、河西王蒙遜の從弟であつて、少時に法を求めて于闐に至り、瞿摩帝大寺に於て天竺法師佛陀斯那に遇ふて居る。佛陀斯那は「天竺比丘、大乘沙門佛陀斯那、其人天才特拔、國中獨步、口誦半億偈、兼明禪法、內

外綜博、無籍不練、故世人咸曰、人中師子」（『大正藏經』第十五卷三四二丁）と云はれる人で、汨渠京聲は此の人に親しく受けたのである。飜譯の經典は『出三藏記集』第二に依ると四部五卷を擧げて居る。その中に於て『禪要秘密治病經』二卷があるが、これは禪經として有名なものである。『歷代三寶記』第十には三十五部三十六卷を擧げ、その中に『禪法要解』二卷の譯を別出して居るが、これは恐らく『出三藏記集』の「安陽從受禪要秘密治病經、因其胡本口誦通利、既而東歸……及還河西、卽譯出禪要、轉爲漢文」と云へるところよりして、別に『禪法要解』があるものと思つたものであらう。しかし『禪法要解』なるものは羅什譯の外には存しないので、汨渠京聲の『禪要』とは『禪要秘密治病經』を指し、現に『大正藏經』第十五卷に收められて居るものである。その內容は修禪に伴ふ疾病治療を明したもので、治阿練若亂心病七十二種法を最初とし、これに「尊者舍利弗所問、出雜阿含阿練若事中」と細注し、それより治噎法、治行者貪婬患法、治利養瘡法、治犯戒法（已上上卷）治樂音樂法、治好歌唄偈讃法、治水大猛盛因是得下法、治因火大頭痛眼痛耳聾法、治入地三昧見不祥事驚怖失心法、治風大法を擧げ、最後に尊者阿難所問の初學坐者鬼魅所著種種不安不能得定治之法の十二治法を述べて居るが、一經を通じて特筆すべきことはない。

已上に於て禪經實修時代に於ける主なる禪觀傳來者を列擧し終つたのである。要するに此の時代は飜譯講經の傍ら、禪觀を傳へたと云ふのであつて、未だ眞の禪觀傳來者ではない。飜譯を事とせ

ず、講經を主とせず、專ら禪觀を修し、唯だ禪法のみを勸めたと云ふ眞の禪觀傳來者は、先づ佛陀禪師が始まりであると云はねばならぬ。

（五）

佛陀禪師の僧傳は『續高僧傳』第十六に出て居る。本は天竺の人であつた、道友六人と共に伴を結んで修業せられたのであるが、他の五僧は皆證果を得たけれども、佛陀禪師のみは未だ機緣到らず、何等獲るところなくして勤苦勵節、諸國を遊歷して、大に修業を積まれたのである。支那へ來朝せられたのは、北魏の孝文帝（皇紀一一三一—一一五八）の時であつた。孝文帝は佛陀を優遇し、別に禪林を設けて之れに居らしめたと云ふのである。北臺の恒安城内には佛法が非常に盛んであつたので、その當時北臺には百餘寺あり、僧尼二千餘人、四方の諸寺六千四百七十八、僧尼七萬七千二百五十人あつたと云ふて居るから、この佛陀を迎へて大に禪敎を普及せしめたことであらうと思ふ。北魏の太和十七年（皇紀一一五三）には帝都をに洛陽に遷すに及んで、佛陀も亦南遷し、勅して靜院を建てしめた"と云ふことである。佛陀は性幽栖を愛し、屢々嵩岳に往つて人世を謝し、禪觀に親しまれたので、此處の少室山に寺を造られたのが所謂少林寺であつて、初祖達磨大師に依つて倍々有名となつたものである。而して此の少林寺の建立は太和二十一年であつて、齊の建武四年（皇紀一一五六）に當つて居る。佛陀が少林寺に入られた時には、「四海息心之儔、聞"風響"會者、衆恒數百、篤"課出要"成濟

極焉」と云ふて、非常に盛大であつたやうに思はれる。佛陀の終りしところは知ることが出來ない。その弟子には慧光と道房との二人があつたので有名である。慧光は一興行師の小兒であつたが、佛陀に認められて佛門に入り、更に轉じて律部を專門に修したやうである。卽ち道覆律師に從つて『四分律』を起した光統律師がそれに當るのである。彼れの性格は極めて放縱不羈であつたが爲めに、佛陀は律を修めて慧を磨かしめやうとしたのが、却つて戒律を專業となさしめたものであらう。故に佛陀も彼れが禪門を離れたと云ふことを大に惜しんだと云ふ記事が僧傳に出てゐる。

次に道房の僧傳は未詳であるけれども、その弟子に有名な僧稠が出て居る。僧稠の僧傳は『續高僧傳』第十六、『神僧傳』第三に委しく出て居るが、彼れは實に佛陀禪師の禪敎を擧揚した人であらう。初めは道房禪師に從つて大に習禪を積み、『涅槃經聖行品』に依つて四念處法を修し、更に趙州障供山に行つて道明禪師に從ひ十六特勝法を受けたのである。而して後に佛陀禪師に從つて己證を呈したところ、佛陀は「自葱嶺已東、禪學之最汝其人矣」と云ふて大に僧稠を推賞したと云ふことである。終に嵩岳寺に住し、或は懷州の馬頭山にも移り、時には北魏の孝明帝にも孝武帝にも召されたが、辭して出でず、文宣帝の懇請に至つて止むなく鄴城に出たと云ふことである。委しいことは『續高僧傳』第十六に出て居る。北齊の乾明元年（皇紀一二二〇）四月十三日、春秋八十一で入寂せられた。弟子に曇詢あり、曇詢の弟子に靜林、道願、惠方等の達者があつたと云ふことである。

此の如く佛陀禪師の禪法は一時盛んであつたが、さて佛陀禪師とは如何なる人であるか、その僧傳は判然せぬ。僧稠の僧傳のところには跋陀と云ひ、少林寺祖師三藏と云ふて居るが、果して如何なる人であつたらうか。跋陀と云へば佛陀跋陀羅か求那跋陀羅を連想するけれども、どうも時代が相違するし關係がないやうである。或は佛陀を以て同時代の佛陀扇多であると云ふ人もあるが(註九)これとても容易に信を置く譯に行かぬ。佛陀扇多の僧傳は續高僧傳第一の菩提流支傳に附加せられて居る。即ち左の如し。

又有北天竺僧佛陀扇多、魏言覺定、從正光元年、至元嘉二年、於洛陽白馬寺及鄴都金華寺、譯出金剛上味等經十部。(『大正藏經』第五十卷四二九丁)

と云ふて居る。『大唐內典錄』第四、『開元釋敎錄』第七等には一十部合一十一卷の譯出と云ひ、その內容を檢するに、これと云ふて禪經らしいものは見當らない。また佛陀扇多は正光元年(皇紀一一八〇)から元象二年(皇紀一一九九)までに譯經したと云ふのであるから、佛陀禪師の年代とは少しく相違するやうに思ふ。即ち正光元年は梁の武帝の普通元年に當り、常に云ふ禪宗初祖達磨大師の支那廣州の地へ來朝せられた年であつて、佛陀扇多は寧ろ達磨大師と同時代の人と云ふべきで、佛陀禪師よりは後輩に屬すべく、これを同一人と見るのは無理であらう。

(六)

佛陀禪師時代の禪觀傳來者で有名なのは曇無毗である。傳記は明かでないけれども、玄高の師であると云ふことは慥かである。故に彼れは凡庸の人ではなく、眞の禪觀傳來者であつたであらうが、悲しいことには餘りに峻嚴な禪風であつたが爲めに師承するものがなかつたやうである。

有外國禪師曇無毗、來入其國、領徒立衆、訓以禪道、然三昧正受既深且妙、隴石之僧稟承蓋寡、高乃欲以己率衆、既從毘受法。（『大正藏經』第五十卷三九七丁）

次に勒那摩提は『十地』『寶積』等を飜譯し、また講經もした人で、眞の禪觀傳來者ではなかつたやうであるけれども、その門下には多くの習禪者を出したので有名である。彼れは中天竺の人で、魏の宣武帝元始五年（即ち天監七年（皇紀一一六八））を以て初めて洛邑に來朝せられたのである。實に博聞强記の人で良く一億偈を誦したと云ふことである。而かも一偈に三十二字あつたと云ふことであるが、しかし其の尤も得意とするところは禪法であつて良く遊化せられたと云ふことである。その門下には僧達と云ふ人があつた。『續高僧傳』第十六に依つて見ると、「振錫洛都、因遇勒那三藏、奉其新誨、不久値那遷化、覆述地論聲驗伊穀」と云ひ、後に慧光律師に就て『十地論』を聽いて幽旨を發明せられ、從つて菩薩戒を受けられたのである。善く論議に長じ、その禪法は弘く世間に流布せられたと云ふことである。故に梁の武帝も特に請じて弟子の禮を取り、肉身の菩薩と云ふて禮拜せられたと傳へ、また同時代の寶誌和尙も大福德の人と申して推賞して居る。齊の文宣帝も

殊禮を加へたと云ふのであるから決して凡庸の人でなかつたに相違ない。常に『華嚴』『四分』『十地』等を講じ『維摩經』をも讀誦せられたのである。

一時少覺微疾、端坐繩床、口誦般若、形氣調靜、遂終於洪谷小寺、春秋八十有二、卽齊天保七年（皇紀一二一七）六月七日也、宣帝聞之、崩騰驚赴、擧聲大哭、六軍同號、山林爲動、葬於谷中巖下。（『大正藏經』第五十卷五五三丁）

と云ふところを見ても、その禪風を知ることが出來る。また勒那摩提の弟子に僧實と云ふものもあつた。『續高僧傳』第十六に依つて見ると、「因遇勒那三藏、授以禪法、每處皇宮、諮問禪秘、那奇之曰、自道流東夏、味靜乃斯人乎」と云ふて居る。保定三年（皇紀一二二三）七月十八日、春秋八十八で入寂した。その弟子に曇相あり、その門流は後世までであつたところより考へても勒那摩提の禪風は餘程注意して見なければならぬと思ふ。兎に角、この時代の禪觀者として有名なのは、佛陀禪師と勒那摩提とであつて、その門下には多くの人が集まつたやうである。中にも佛陀禪師の門流の僧稠と、勒那摩提の弟子の僧實とは最も傑出したもので、道宣律師も『續高僧傳』第二十に「高齊河北獨盛僧稠、周氏關中尊登僧實」と云ふて居る。しかし其の禪風は如何なるものであつたか、素より深いことは知ることが出來ないけれども、前にも云ふた如く勒那摩提は飜譯の傍ら禪觀を勸めた人であつて、眞の禪觀傳來者ではない。佛陀禪師は眞の禪觀傳來者であつたらうけれども、そ

の門流の僧稠は佛陀禪師に學ぶ已前に、四念處とか十六殊勝法とか云へる小乘禪を修して居た人で、先入主となり、その弘むるところは小乘の禪敎を主としたものではなからうか。故に從來の達磨禪とは大に差別して見なければなるまい。道宣律師の如きすら「稠懷念處清範可崇、摩法虛宗玄旨幽蹟」と云ふて批評して居るが、眞の禪觀傳來者は何と云ふても達磨大師であつて、純の純なる禪法は達磨大師の西來を待たなければならなかつたのであらう。

次に『高僧傳』第十一の慧覽の傳を讀んで見ると、

覽會遊西域、頂戴佛鉢、仍於罽賓、從達摩比丘、諮受禪要、達摩曾入定、往兜率天、從彌勒受菩薩戒、後以戒法授覽。（『大正藏經』第五十卷三九九丁）

と云ふて居る。慧覽は酒泉の人、玄高と共に禪門に於て名を爲した人である。羅浮の天宮寺、鐘山の定林寺、中興寺等に住し、宋の大明中（皇紀一一一七―一一二五）に春秋六十餘で歿した。この慧覽の學んだと云ふ達摩比丘とは如何なる人であつたか不明であるが、或る一本には達磨達比丘と云ふて居るけれども、『景德傳燈錄』第二、『傳法正宗記』第九に出て居る師子尊者付法の一人とは大に時代が違ふから、これは別人の達磨達比丘であるに相違ない。

尙ほ此の當時の禪觀者には『續高僧傳』に多くの人を列ねて居るが、先づ其の最初に擧げるべきは梁の僧副である。『續高僧傳』第十六に依つて見ると、僧副は達摩禪師に從つて出家したと云ふ

て居るが、この達摩禪師と云へる人も如何なる人であつたか判然せない。僧副は春秋六十有一で普通五年（皇紀一一八四）に歿して居ると云ふのである。而して禪宗の初祖と云はるべき達摩大師は普通元年の來朝であるから、僧副が出家した時に師事した達摩禪師は、それより少しく已前の人であつたと云はねばならぬ。僧副は達摩禪師に從つて出家し、禪觀を修して後に齊の建武の年、南揚輦に遊び、鐘山定林下寺に止まつて、大に道俗の歸依を受け、また梁高も素より其の清風を慕ふて開善寺を造り、また蜀に至つては其の禪法を說いて大に感化を與へたと云ふことである。而して此の僧副は良く禪宗初祖の弟子の道副と間違へらるゝけれども、これは別人であつて決して同じく見てはならぬ。

また『續高僧傳』第十六に梁の慧勝の傳記がある。これに依ると慧勝も外國禪師達摩提婆に學んだと云ふことであるが、この達摩提婆が如何なる人か判然せない。慧勝は永明五年（皇紀一一四七）に鐘山延賢精舍に移り、天監年中に春秋七十で歿して居る。また普通五年に六十八で歿したと云ふ慧初禪師あり。また道珍禪師、法歸禪師、慧景禪師等も同じ時代の人であつたが、特に後世に名の殘つて居るものは保誌和尙と善慧大士とであつたらうと思ふ。

（七）

保誌和尙は或は寶誌とも寶志とも書くが、その僧傳は『高僧傳』第十、『神僧傳』第四、『景德傳

燈錄』第二十七等に出て居る。いま『高僧傳』に依つて見ると、

釋保誌、本姓朱、金城人、少出家止京師道林寺、師事沙門僧儉爲和上、修習禪業、至宋太始初、忽如僻異、居止無定、飲食無時、髮長數寸、常跣行街巷、執一錫杖、杖頭掛剪刀及鏡、或掛一兩匹帛、齊建元中、稍見異迹、數日不食、亦無飢客、與人言語、始若難曉、後皆効驗、時或賦詩、言如讖記、京士士庶、皆共事之。（『大正藏經』第五十卷三九四丁）

此の如く保誌和尙は奇言奇行に富むを以て、宋の武帝は衆人を惑はすものとなし、終に拘禁したと云ふことである。其後、梁の武帝の卽位するに及んで大に崇禮を加へ、詔を下して「誌公迹拘塵垢、神遊冥寂、水火不能燋濡、蛇虎不能侵懼、語其佛理則聲聞以上、談其陰倫則遁仙高者、豈得以俗士常淸空相拘制、何其鄙狹一至於此、自今行道來住、隨意出入、勿得復禁」と云はれて居る。それより保誌は多く禁內に出入し、尙は奇言奇行の多きこと枚擧に遑がない位であつた天監十三年（皇紀一一七四）冬に至つて、疾なくして終つたと云ふことである。而して彼れの年は常に面貌五六十年許りで、少しも老いたることなく、その年を測るものがなかつたが、保誌の外舅弟は誌より四歲の年少者であつたと云ふところより考へて、彼れは九十七歲で終つたものであらうと云はれて居る。

保誌は實に不測の異人であつた。梁の蕭子顯も『摩訶般若波羅蜜經序』に「誌法師者、神通不測、

靈迹甚多」と云ひ、梁の武帝も『淨業賦』に「沙門寶誌、形服不定、示見無方」と云ふて居る。その思想內容に就ては『景德傳燈錄』第二十九に『誌公和尙大乘讚』十首、『誌公和尙十二時頌』十二首、『誌公和尙十四科頌』を載せて居るが、共に眞僞未決のものばかりである。卽ち梁の『高僧傳』にも、唐の『廣弘明集』にも載せてなく、後代の宋に於ける『景德傳燈錄』に始めて錄出して居るのであるから、そこに疑問を抱かねばならぬけれども、兎に角これに依つて見ると『大乘讚』の如きは實に進んだ禪旨を明したもので、その中の一二を擧げるならば、

大道常在目前、雖在目前難覩、若欲悟道眞體、莫除聲色言語、言語卽是大道、不假斷除煩惱、煩惱本來空寂、妄情遞相纏繞、一切如影如響、不知何惡何好、有心取相爲實、定知見性不了。

長欲爲存一捨一、永與眞理相疎、更若愛聖憎凡、生死海裏沈浮。

徒費功夫無益、幾許枉用工夫、不解卽心卽佛、眞似騎驢覓驢、一切不憎不愛、這箇煩惱須除。（『大正藏經』第五十一卷四四九丁）

と云ふて居るが、實に全篇盡く禪語ならざるはなく、六祖大師已後の黃檗臨濟の常套語をも見ることが出來るから、若しこれが眞實に保誌和尙の作なりとせば、祖師禪は保誌を以て創まれりと云はなければならぬ。『十二時頌』は、寅、卯、辰等の十二時に就ての頌文であり、『十四科頌』は菩提煩

惱不二、持犯不二、佛與衆生不二、事理不二、靜亂不二、善惡不二、色空不二、生死不二、斷除不二、眞俗不二、解縛不二、境照不二、運用無礙、迷悟不二等を列頌したもので、この內容は『維摩經』より得て居るところが多いやうに思ふ。

また保誌和尙が梁の武帝と遭ふて問答した言句には非常に隱語が多いやうで、これは慥かに後氏に於ける禪の商量に似て居ると思ふ。いま其の一例を『高僧傳』に依つて擧げて見ると、

上嘗問誌云、弟子煩惑未除、何以治之、答云、十二識者、以爲十二因緣、治惑藥也、又問十二之旨、答云、旨在書字時節刻漏中、識者以爲書之、在十二時中、又問、弟子何時得靜心修習、答云、安樂禁、識者以爲禁者止也、至安樂時乃止耳。（『大正藏經』第五十卷三九四丁）

尙ほ禪宗の初祖達摩大師が梁の武帝と相見し、所謂『碧岩錄』第一則に出て居る無功德の話の商量があつた時、この保誌和尙が出て來て、達摩大師を觀音の再來なりと告げたと云ふことが傳へられて居るけれども（註十）これは少しく時代が違ふので信ずることは出來ない。卽ち保誌は前にも述べた如く天監十三年に歿したので、達摩大師の來朝せられた普通元年には旣に在世して居らなかつたのであるから、『碧岩錄』の記事の如きは、どうも疑はざるを得ないのである。

（八）

次に善慧大士に就て一言して置かう。善慧大士の傳記は『續高僧傳』第二十五、『神僧傳』第四、

『景德傳燈錄』第二十七に出て居る。その最も委しいものは唐の進士樓頴の撰出した『善慧大士語錄』（『續藏經』第一輯第二編第二十五套第一册）である。この錄中には唐の侍中徐陵の勅を奉じて撰出した『善慧大士碑文』及び唐の越州刺史魚袋元の輯述した『還珠留書記』を始めとして、善慧大士の詩篇を盡く網羅して居るので、これに依らば善慧大士の研究は充分に盡されるであらう。

善慧大士は前の保誌和尙と共に梁の二大士と稱せられ、その性行は極めて不測の奇言奇行に富み或は支那の卑俗なる民間信仰を其儘に結び付けて居ると云ふので、その『語錄』の如きは後世の僞作であり、善慧大士も全く架空的人物であると論斷する學者もあるが（註十一）これは甚だしい誤謬で、素より其の思想內容に於ても、その奇言奇行に就ても、そこに幾多の不審の點が澤山にあらうけれども、それを以て直ちに架空的人物なりと論斷するのは、甚だ淺薄なる見解と云はねばならぬ。勿論、今云ふ如き善慧大士はないにしても、決して架空的人物でないことは事實である。而して其の史實を『續高僧傳』に依つて考へて見ると、先づ、

陳宣帝時、東陽郡烏傷縣雙林大士傳弘者、體權應道躡嗣維摩、時或分身濟度爲任、依止雙林導化法俗、或金色表於胸臆、異香流於掌內、或見身長丈餘臂過於膝、脚長二尺指長六寸、兩目明亮重瞳外耀、色貌端峙、有大人之相、梁高撥亂弘道偏意釋門、貞心感被來儀賢聖、沙門寶誌發迹金陵、然斯傳公雙林明道、時俗唱言莫知其位、乃遣使齎書、贈梁武田、雙林樹下當

來解脫善慧大士敬白國主救世菩薩、今條上中下善、希能受持、其上善者略以虛懷爲本、不著爲宗、亡相爲因、涅槃爲果、其中善、略以持身爲本、治國爲宗、天上人間果報安樂、其下善、略以護養衆生、帝聞之延住建業、乃居鐘山下定林寺……至陳太建元年夏中、於本州右脇而臥、奄然就昇遐。（『大正藏經』第五十卷六五〇丁）

と云ふて居るのが最も古い記事である。なほ『善慧大士語錄』や『景德傳燈錄』の記事に依つて見ると、彼れは姓を傅と云ひ、名を翕と呼んで居る。故に、傅翕とも傅大士とも申すのであるが、前に擧げた『續高僧傳』とか『神僧傳』の記事は傳弘に造つて居るから、傅弘と云ふのが正しいかも知れぬ。齊の建武四年（皇紀一一五七）五月八日を以て生れ、年十六にして劉氏の女妙光を娶つて普建、普成（註十二）の二子を得たのである。而して彼れは幼少の時より全く修學するところなく、唯だ終日漁を事として、而かも魚を獲るの心もなく、魚を獲れば常に竹籠の中に入れて深く水中に沈め、「欲去者去、止者留」と云ふたと云ふことである。然るに二十四歲の時、稽停塘下に於て嵩頭陀と云へる一胡僧に遇ひ、その本地を告げられ、水中に浮べる己が影に圓光寶蓋の伴へるを觀て、初めて自己は彌勒菩薩の化身なりと云ふ大自覺を得、忽ち漁具を捨てゝ、嵩頭陀の指示に隨つて、松山下雙檮樹の間に草菴を結び、自ら雙林樹下當來解脫善慧大士と號し、晝は田を耕し夜は道に親しんだのである。かの有名な「空手把鋤頭、步行騎水牛、人從橋上過、橋流水不流」の偈の如きは、こ

の時に頒したものと云はれて居る。

大通二年（皇紀一一八八）妻子を賣つて錢五萬を獲て大法會を營み、大通六年には梁の武帝に進書し更に帝及び昭明太子に法を說き、更に松山下に雙林寺を建て、松山頂に雲黃山を拓き、また踵山の定林寺にも住し、專ら神異と說法とを以て世間を風靡せしめたと云ふことである。而して陳の太建元年（皇紀一二二九）嵩頭陀の入滅を知つて、自ら『還源詩』十二首を作り、壽七十有三にして他界せられたと云ふことである。卽ち『景德傳燈錄』に依つて見ると、

嵩頭陀於柯山靈巖寺入滅、大士縣知曰、嵩公兜率待我、決不可久留也、時四側華木方當秀實欻然枯悴、太建元年已丑四月二十四日示衆曰、此身甚可厭惡衆苦所集、須愼三業精勤六度……

……言訖趺坐而終、壽七十有三（『大正藏經』第五十一卷四三〇丁）

而して此處に疑問となるのは嵩頭陀である。いま『神僧傳』第四を見ると

嵩頭陀法師、居婺州雙林北四十里巖谷間、爲創香山寺、及建靈刹道俗萬衆共引麻絙擧刹、絙忽中斷引者皆顚躓、師乃曰、有何魔事使之然乎、因以鉢盛淨水、內外攪之呪而作禮、捧鉢繞刹一周、刹乃不假人功屹然自立、後又至萊山立寺、師常曰、萊山王而不久、香山久而不王、後果如其所言、竟不知所終。（『大正藏經』第五十卷九七一丁）

とあるが、詳細を知ることは出來ない。また『景德傳燈錄』には「天竺僧達摩（時謂嵩頭陀）」と申して居

るが、素より此の達摩は禪宗初祖達摩大師でなからうと思はれる。それは成程、善慧大師の二十四の時、嵩頭陀に會ふたと云ふのは、梁の普通元年に當り、達摩大師の支那へ始めて渡來せられた時に當るけれども、『景德傳燈錄』の錄者は達摩大師の渡來を普通八年と云ふて居るから、大師渡來已前の嵩頭陀と見て居たに相違ない。要するに此の嵩頭陀は疑問の人ではあるが、詳細を知ることは出來ぬ。恐らくは此の時代に多くの禪觀傳來者が渡來したものと云ふことを想像し、達摩禪師とか達摩比丘とか、或は達摩提婆と稱する人が其の主なる代表であつて、嵩頭陀も其の中の一人であつたらうと思ふのである。

（九）

次に善慧大士の思想內容に就て一言することにしやう。彼れの作と云へるものに『心王銘』『獨自詩』『還源詩』『行路難』『行路易』『率題』『浮謳歌』『四相詩』『十勸』等が盡く『善慧大士語錄』の中に編入せられて居るが、この『語錄』は素より後代に編纂せられたもので、どの程度まで信用することが出來るか非常に疑問であるが、（註十三）しかし今はこれを判然に考證することは出來ないので、唯だ大體に於て、その思想の色彩を窺ふことにしやう。

善慧大士の思想は多分に三論的の色彩を帶んで居るやうに思ふ。その僧傳に代つても、「釋迦引前維摩接役」と云ひ、「大品經云、有菩薩從兜率來、諸根猛利疾與般若相應、卽吾身是也」と

云ひ、或は壽光殿に金剛經を講じたと云ふ如きは最も注意すべきことであらう。また『行路難』に於ても、非斷非常、眞照無照、心相實相、般若無諍、本際不可得、三空無性などゝ題するところより考へても、先づ三論空宗を根底となし、在家居士として維摩の如きを理想とし、身を捨てゝ菩薩行の實現に努力せられたやうに思はれる。けれども彼れの思想は單に三論を根柢としたと云ふに止まらず、更に一歩を進めて天台と禪との思想にまで說き及んで居るので、天台敎義の思想は或はこの善慧大士に始まつたと云ふても過言ではなからう。卽ち彼れの『獨自詩』にある左の二詩が最も注意され、荆溪大師の如きも『止觀義例』に引用し、處元の如きは更に『止觀義例隨釋』に於て二詩の文意を釋して居る。今『止觀義例』の文に依つて引證することにしやう。（註十四）

獨自精、其實離聲名、三觀一心融萬品、荆棘叢林何處生。

獨自作、問我心中何所著、推檢四運併無生、千端萬累何能縛。（『大正藏經』第四十六卷四五二丁）

卽ち荆溪大師は善慧大士を尊崇して等覺の菩薩と云ひ、已上の二詩を以て自家所立の法門たる事理二觀に配當して居るのである。素よりこれには種々なる議論もあるけれども、善慧大士の思想は慥かに天台敎義と一脈の通ずるところがあるから、傳敎大師の如きも『內證佛法相承血脈譜』に於て雙林寺傳大士を加へ左の如く云ふて居る。

謹案、無生義序云、雙林大士、厥名善慧、示跡同人、功高補處、居于茲土、利物爲懷、波羅

蜜門、恒爲汲引、又案、止觀義例云、東陽大士、位居等覺、尙以三觀四運、而爲心要。（『傳敎大師全集』第二　五三八丁）

更に此の三觀四運の說明を加へ、如何なる點が天台敎義と通ずるかを考證して見たいと思ふけれども、それは他日の機會に讓り（註十五）今は特に禪の思想方面に就て觀察することにしやう。

禪の思想に於ては先づ『心王銘』に顯はれたる卽心卽佛の思想であつて、今更これに就て喋々するまでもないことであらう。然るにこの『心王銘』も『善慧大士語錄』第三十九に載せてあるものとは同文であるが、『善慧大士小錄』に載せてある『大士說心王論』とはその文句が大に相違して居るのである。故にこの『小錄』が原本であつて、『傳燈錄』が修正して居るやうに思ふ。（註十六）いま『小錄』に依つて引用すれば、「是佛是心、是心是佛、念佛念心、念心念佛」とか「除此心王、更無別佛」とか云ひ、更に「慕道之士、好自觀心、知心在內、不向外尋、識心是佛、識佛是心、分明見佛、曉了識心」と云ふが如きは、慥かに禪的思想であつて、六祖大師已後、黃檗臨濟の思想も既に此處に端を發して居るものゝやうに思はれる。その他『碧岩錄』第六十七則の「梁武帝請講經」の如きは公案として有名である。卽ち『五燈會元』第二に、

梁武帝請講金剛經、士（善慧大師）纔陞座、以尺揮案一下、便下座、帝愕然、聖師曰、陛下還會麽、帝曰不會、聖師曰大師講經竟（『續藏經』第一輯第二編乙第十一套第一册三九丁）

と云ふのであつて、『景德傳傳燈錄』第二十七に「異日帝於壽光殿請大士、講金剛經、大士登座、執相板唱經、成四十九頌」と云へるものより變形して公案となしたものであらう。或は前に述べた「空手把鋤頭」等の頌、或は「猛風不動樹、打鼓不聞聲、日出樹無影、牛從水上行、行路易、路易眞可憐、修道懈此意、長伸兩脚眠」とか、或は「夜夜抱佛眠、朝朝還共起、起坐鎭相隨、語默同居止、纖毫不相離、如身形相似、欲知佛去處、祇這語聲是」とか云へる如きは、共に禪の思想を遺憾なく云ひ顯はしたものと云はなければならぬ。

要するに善慧大士の思想は餘程後人の挿入があつて、全部を信ずることは出來ないにしても、良く達摩禪の先軀として保誌和尙と共に忘れてならぬ人である。而して此の時代に後世より禪宗の初祖と仰がるゝ達摩大師が支那へ來朝せられ、眞に純の純なる禪風を全提して、驀直に宗旨を擧揚せられたと云ふのである。

註一　『開元釋敎錄』第五に佛馱什所譯の三部三十一卷を出す。卽ち『五分律』三十卷、『五分比丘戒本』一卷、『彌沙塞羯磨』一卷を云ふ。

註二　『出三藏記集』第二に求那跋摩所譯の四部十三卷を出す。卽ち『菩薩善戒』十卷、『優婆塞五戒略論』一卷、『三歸及優婆塞二十二戒』一卷、『曇無德羯磨』一卷を云ふ。而して『開元釋敎錄』第五には十部十八卷を出す。

註三　『開元釋教錄』第五には十二部十七卷を出す。中に『五門禪經要用法』一卷、『禪秘要經』五卷あり。

註四　境野博士『支那佛教史講話』上卷五五六丁參照

註五　拙稿「四卷楞伽に就て」參照。『禪學研究』第二號所載

註六　玄奘譯の『品類足論』と同本異譯にして、『大正藏經』第二十六卷に收む。

註七　『曆代法寶記』に「有東都沙門淨覺師、是玉泉神秀禪師弟子、造楞伽師資血脈記一卷、接引宋朝求那跋陀三藏爲第一祖云云」と云ふ。即ち『四卷楞伽』の飜譯者なるが故に第一祖となす。別に禪觀者と云ふべき證據とはならず。

註八　求那毘地の僧傳は『出三藏記集』第十四、『高僧傳』第三、『歷代三寶記』第十一、『開元釋教錄』第六に出す。

註九　境野博士『支那佛教史講話』上卷三二〇丁及び五九二丁參照。

註十　『碧岩錄』第一則に「舉、梁武帝問達摩大師、如何是聖諦第一義、摩云廓然無聖、帝曰對朕者誰、摩曰不識、帝不契、達摩遂渡江至魏、帝後舉問志公、志公曰陛下還識此人否、帝曰不識、志公曰此是觀音大士傳佛心印云云」と。

註十一　境野南士、『支那佛教史講話』上卷五九七丁參照。

註十二　善慧大士は輪藏の創始者なるが故に之れを輪藏に祀る。二童子の侍するは普建、普成なり。卽ち『佛祖統紀』第三十三に云く「梁傳大士、愍世人多故、不暇誦經、及不識字、乃於雙林道場創轉輪藏、以奉經卷、其誓有曰、有三登吾藏門者、生生不失人身、有能信心推之一匝、則與誦經其功正等、有能旋轉不計數者、藏前相承列大士像、備儒道釋冠服之相者、以大士常作此狀也」と。

註十三　松本博士「善慧大士小錄に就て」參照。『臨濟宗大學々報』第三號所載

註十四　『善慧大士語錄』の文と『止觀義例』の文とは少しく異るも、今は『義例』の文分明なるが故に引用す。

註十五　羽溪了諦氏「傳大士に就て」參照。『臨濟宗大學々報』創刊號所載。
島地大等氏『天台敎學史』七二丁參照。

註十六　松本博士「善慧大士小錄に就て」參照。前出。